た蚊を知るために定期的に幼虫の採集を行つた結果をこゝに報告する。

調査は 1957 年 5 月初旬より 6 月下旬にかけて 12 回花石、竹花立より採集した。調査対象地区は都心部全量を眼下に見ることが出来る市街地より離れた斜面地帯で旧墓地に分れる。その中旧墓地では 292 個体（花石 192, 竹花立 107, その他 3）であり新墓地では 163 個体（花石 51, 竹花立 108, その他 4）で計 455 個体である。

発見率は総調査基数 10291 カ所に対し 455 で 0.04 % である。種類別にみると *A. japonicus* (177) が最も多く次に *A. flavopictus* (159) *Armigeres subalbatus* (84) *A. togoi* (23) 等で僅かの *Tripteroides bambusa* が見受けられた。又人家に近い墓地附近の水溜りより *C. pipiens* 5 個体がみられた。即ち *A. japonicus* が総個体数の 40 % *A. flavopictus* 36 %, *Armigeres subalbatus* 18 %, *A. togoi* 0.5 % となつている。こゝで見られることは同一種類の幼虫が同一棲息場所に棲んで居ることは勿論であるが種の異つた幼虫が旧墓地に於ては花石で 2 種 14 カ所, 3 種 6 カ所, 新墓地では 2 種 8 カ所, 3 種 2 カ所で又花立竹では旧墓地では 2 種 8 カ所, 3 種 3 カ所, 新墓地では 2 種 6 カ所 3 種 2 カ所を見た。

その後衛生課員の手によつて竹花立は撤去せられ花石には Lindane 乳剤による一斉駆除が各墓石ごとに然も確実に実施された。その後花立竹の調査は不可能であつたが墓石の花石では 6 カ所 (9 個体) 見たのみであつた。

(福島県浪江保健所)

大阪地方のツツガムシの研究 (第 3 報): 藤戸貞男・武衛和雄・福原佳春 Fujito, S., Buei, K. & Fukuhara, Y.: Trombiculid mites in Osaka Prefecture (III)

1958 年 12 月から 57 年 11 月にかけて 1 年間、豊能郡東能勢村高山部落においてツツガムシの季節的消長について調査した。高山部落は標高約 400 m の山間地で、周囲は山林にかこまれ山の斜面を利用してわずかな耕地のある小部落である。全期間を通してアカネズミ、ヒメネズミ、スミスネズミ及びヒミズモグラ計 46 頭が捕獲されたが、その大部分はアカネズミであつた。宿主の種類によつてツツガムシの寄生状態は明瞭に異つており、こゝではアカネズミのみを対象とした季節的消長を考察した。全期間をとおして *fuji*, *kochiensis*, *japonica*, *tamiyai*, *kansai*, *kitasatoi*, *pallida*, *miyajimai*, *intermedia*, *kuroshio*, *G. saduski*, *E. ikaoensis* 3 属 12 種のツツガムシが採集され、これらの種類が最も豊富に出現したのは 11~3 月にかけてであり、12 月は種類も個体数も最

高を示した。各種類の消長についてみた場合、これらのツツガムシ幼虫の出現様式は大別して 2 つのグループに分けられる。即ち 8 月には全く採集されなかつたが春秋に多く出現し、むしろ冬季に少いが年間をとおして発生すると考えられる *kitasatoi* と、他の種類の大部が示すように春夏に向つて漸減し、あるいは全く消失し、秋季に再び出現して冬にモードを生ずるいわゆる冬型のグループの 2 つの型があることを知つた。

(大阪府環境衛生課、大阪府池田保健所)

シンポジウム

1. 鼠駆除の実際

ネズミ駆除の問題点

佐々学

(伝研・寄生虫)

Sasa, M.: Problems in the rat-control

鼠駆除は組織と経費と技術さえそなわつていたらたやすく実施出来るはずである。とくに今日においてはネズミ類の生態の研究もすすみ、またクマリン剤などのすぐれた殺鼠剤も使われているのだから。しかし実際にはなかなかうまくいっていないのはなぜだろう。

ネズミ駆除の対策には 2 つの異つた面がある。ネズミ駆除とは、その棲息数をへらし、被害を減少することである。その第 1 は環境的な方法、つまり施設改善や清掃によりネズミの生育環境を悪くし、その食物をなくして、棲息数の許容限度を低くしてゆこうという方法である。ネズミは繁殖力の著しい動物であり、従つて環境の許容限度に対していつも飽和した個体数が生息していると考えてよい。第 2 は殺鼠法であり、毒剤や捕鼠器がこれに使用される。しかし、単に鼠を殺してもそれだけ棲息数をへらしたことはない。短日月のうちに環境の許容度まで個体数がすぐ恢復することが多いからである。これまで、鼠駆除というと、年に 1 回とか 2 回とかの割で殺鼠剤の配布というような作業が機械的にくりかえされて来た所が多いが、これで果して本当に効果をあげたであろうか。鼠駆除の目的を充分にとげるには、前述した環境的な対策と、能率よい殺鼠法とが有機的な関連をもつて実施されるべきであろう。しかし、その実行には意外な困難が組織や経費の面で現れてくるし、技術的には一段と考慮を加え改善を行う必要がある。鼠駆除が、ハエ蚊駆除と異なる第 1 の特徴として我々が感ずるのは、棲息地域やその環境の差によつて、同